金木町の文化財

嘉瀬の奴踊りと金木荒馬

三百年前からの田植踊り

津軽半島の水田地帯は、今から四百年前までは、十三湖の一部でそのほとんどが湿地帯であったが、津軽四代藩主の信政公が、木造俵元（五所川原）、金木地方（津軽三新田）の開田事業を完成させ、現在は、百万石の美田となっている。金木新田は、元禄年間（約三百年前）主として、秋田、山形地方からの移住者によってなされたといわれている。

この開田事業は、非常な難工事であったため、木造地方では〝弥三郎節〟、金木地方では〝嘉瀬の奴踊り〟など全国的にも有名な民謡が生れているが、〝金木荒馬〟もまたすぐれている。

これらは、いずれも、上古の『田遊び』の演技を舞踊化したものであるが、以下、特異な由来のある〝嘉瀬の奴踊り〟と〝金木荒馬〟について紹介してみよう。

【写真＝昭和45年度 全国大会で優勝した〝輪踊り形式〟の『奴踊り』】

嘉瀬の奴踊りの由来

『嘉瀬の奴踊り』は、金木新田の開拓事業の成就祈禱の『願人坊』が、田植時期に、出雲大社や住吉神社の神事である〝田植踊り〟を勧進して、金木新田の『田植踊り』としたものであるが、特に嘉瀬地方に残っているのが『嘉瀬の奴踊り』で、日本本土の北限に現存している貴重な、しかも、他に例のない動きをもつ、特異な田植踊りである。

〝嘉瀬と金木の間の川コ
　石コ流れて木の葉コ沈む〟

誠実なものは恵まれず、狡猾なものがはびこり「この世の中はサカサマだ」「残念なことだ」と唄うこの奴踊りには、次のような伝説もある。

津軽4代藩主の信政公の命により、金木地方の新田開拓のため、嘉瀬に派遣された藩士鳴海伝右エ門は、実直な性格で、開拓事業に全力を尽したのであるが、要領よく立ちまわったり、上役にとりいることをしなかったため、開拓事業が遅れ、上役の不興をかい、同僚たちにもバカにされることが多かった。鳴海伝右エ門の忠僕徳助が、これを無念に思い、秋の取入れの振舞酒の席や、月見の夜などに、即興的に唄ったり、踊ったりしたのが、この奴踊りの始まりだといわれている。

㊟　『嘉瀬の奴踊り』は、はじめは田植踊りであったが、時代は不明であるが、『盆踊り』となって現存し、昭和44年12月1日付で青森県文化財（技芸）として指定されている。

現型は、盆踊りの〝輪踊り〟形式であるが、現在は、舞台での〝輪踊り〟〝入り替え踊り〟のほか、パレードなどに参加する場合を考慮しての〝流し踊り〟と3つの形式をとりいれている。

嘉瀬の奴踊り

〝サーサ　これから　奴踊りおどる
　サーサ　これから奴踊り　おどる
　　ソラ　ヨヤナガ　サッサ

〝津軽平野の千万石は
　秋に黄金の　また波がたつ
　（囃）　以下略す

〝嘉瀬と金木の間の川コ
　石コながれて　木の葉コ沈む

〝こがね波たつ　みのりのおぼん
　奴踊りで　この夜がふける

〝おれのかくじのたたらび花コ
　昼間しおれて　また夜にさく

〝竹の切り口に　シコタン　コタンと
　なみなみたっぷり　たまりし水は
　飲めば甘露の　また味がする

〝稲妻ピカピカ　雷ゴロゴロ
　いくじなし　おやじ
　バラカブさ　ぷっちゃさて
　千両箱ひろた

〝花は千咲く　なる実は一つ
　九百九十九は　まずむだにさく

〝ちがい恋のあらそいはするな
　雪という字も　また墨でかく

〝ふねはでていく　けむりはのこる
　のこるけむりは　また雲となる

金木町とは

金木町は、本州の北の端、津軽半島のほぼ中央に位し、人口およそ1万7千のごく平凡な農業の町である。これといった特徴もないので、県外の人には〝太宰治の出身地〟と説明するのが一番いいようである。
米とリンゴと木材、主な産業といえばこれくらいのものだが、観光資源には比較的恵まれており、町の東方には日本3大美林の1つであるヒバの中山山脈が横たわり、ここに藤ノ滝、七ツ滝など大小さまざまの滝が流れている。
また、金木町には、桜と湖の県立芦野公園があり、春4月下旬からの桜まつりには連日数万の花見客で賑わう。この公園のすぐ隣りの小高い森には〝イタコ〟で有名な川倉の賽の川原があり、旧6月22日から3日間盛大に例祭がくりひろげられる。
民俗芸能としては、この〝さなぶり荒馬〟のほか、嘉瀬の〝奴踊り〟が有名である。

金木は、私の生まれた町である。津軽平野のほぼ中央に位し、人口5、6千のこれという特徴もないが、どこやら都会風にちょっと気取った町である。よくいえば、水のように淡白であり、悪くいえば底の浅い見栄坊の町ということになっているようである。
それから3里ほど南下して岩木川に沿う、五所川原という町がある。この地方の産物の集散地、人口も1万以上あるようだ。よくいえば活気のある町であり、悪くいえばさわがしい町である。かりに東京に例をとるならば、金木は小石川であり、五所川原は浅草といったようなところでもあろうか。

＜太宰治『津軽』より＞

【津軽四代藩主 信政公の さっそうたる乗馬姿を表わした 金木荒馬】

金木荒馬踊りについて

荒馬には殿様　手綱ひきは奴（やっこ）の姿

金木新田の開拓当時、民情視察のため金木村を突然訪れた津軽四代藩主の信政公が、村はずれの丸木橋を、馬に乗ったまま供奴二人に手綱をとらせ、一回二回と後にさがり、右にひき左にまわり三回目にさっそうと橋を渡った。初めて見た藩主のみごとな英姿に感激した村人たちは、村の誉れとして永久に残すべく〝虫送り〟の荒馬踊りにとり入れるようになったのであるが、のちの藩主が北方視察で金木村にきたさい、ときの庄屋角田氏（現角田円蔵氏の先祖）ば、八幡宮神主の笹木氏（現笹木正巳氏の先祖）とともに、四代藩主信政公の橋渡りの勇姿を賞め讃え、いままで農耕を表現してきた〝荒馬踊り〟を、『橋渡りの英姿』をあらわした踊りとしたい旨恐る恐る言上したところ、藩主は非常に気をよくして許され、同行の絵師に〝馬の百態〟を六尺屏風に書かせて与えたと伝えられている。
　後日、庄屋角田、神主笹木の両氏が弘前城中にまねかれ、藩主から『金木荒馬は藩主の姿であるから無礼させるな』といって警護の衣装五着を賜わったのであるが、その後この衣装を着用して虫祭りの警護役として付き添うことになった。したがって金木荒馬の中心となる馬には殿様が乗り、手綱さばきは二人の供奴を表現したものとなっている。

【写真＝舞台で踊る金木荒馬】

金木小唄

作詩 永沢与助
作曲 上原げんと

〽溶ける根雪に鶯鳴いて
　春は絵巻の金木町
　上と下との両町栄え
　日ごと伸びゆく繁昌ぶり
(囃) パットソレ
　ソレ　ヨイトサノセ
　コリャヨイトサノセ
〽ひと眼千両じまんの桜
　夢の芦野湖花の幕
　可愛いあの娘は絵日傘さして
　恋のボートにゃ誰と乗る
(囃)　以下略す
〽嘉瀬のスロープ滑って降りゃ
　雪に輝く町あかり
　酒は人肌アネちゃのお酌
　情たら汁いろりばた

新金木音頭

作詩 藤田桂三
作曲 上原げんと

〽ハア芦野桜は嫁コの桜ヨ
　春に浮かれて化粧する
　野良の仕事も一段落さ
　えびす笑顔で花見酒花見酒
(囃) エーソレ　エーソレ稼ぎゃナ
　きんきら姿の嫁コくる
〽ハアここは北郷
　お米の出とこよ
　奴徳助ひと踊り
　嘉瀬と金木の間の川コ
　小石流れて葉コ沈む
(囃) エーソレ　エーソレ稼ぎゃナ
　きんきら姿の米が出る

発行　青森県北津軽郡金木町役場
編集企画　室